

中国古代における書物の編纂

人文科学研究所助教授 富谷 至

読書・勉学に熱心であることをいう「韋編三絶」という成句は、孔子が『易経』を繰り返し読んだため、書物の綴じ紐が三度も切れてしまったといった故事を典拠としていることはよく知られている。「韋編」とは、竹簡をなめし皮で綴じたもの、少なくとも『広辞苑』などの一般的辞書にはそう解説されている。

私がいつどこでこの成語を習ったのか、もはや定かでないが、最近に至るまで、私も辞書の解説通りに信じてきた。ただ、疑念というほどの大層なものではないにしろ、なんとなく腑に落ちないところがあった。何故、なめし皮なのだろうか？ 竹簡を綴じる場合には当時はなめし皮が使われていたのだろうか？ 孔子が持っていた上等の本（もちろん簡牘の冊書）は、なめし皮で特に綴じていたのだろうか？ それとも、丈夫な皮製の紐が三度も切れるほどよく使ったという、これは比喩なのか？

木簡・竹簡を専門にやりだして、疑問が少し膨らんできた。出土の簡牘のなかには、綴じ紐がそのまま残っている冊書があるが、なめし皮のものではなく、そもそも、綴じ紐は、「縄」と当時は呼んでいたらしい。

両行百札二百縄十枚

建昭二年二月癸酉尉史□付第廿五燧

(EPT 59.154A)

これは、近年内モンゴルエチナ川流域の漢代烽燧遺址から出土した木簡で、その内容は、書写材料の受領記録、「両行」とは二行書きの、「札」とは一行がきの簡牘、それを編綴するものが「縄」である。縄である以上、それは植物繊維を縫ったもので、少なくとも皮ではなからう。

あるとき、学術雑誌に掲載されていた中国の研究者の短文に接し、目から鱗が落ちるがごとくに疑問が氷解したのである。その説は、「韋」と

は、緯度の「緯」に通じ、つまりヨコ糸のことだというのだ。となれば、なめし皮とは何の関係もなく、「韋編」とはヨコに紐をかけて編綴すること、もしくは編綴した冊書に他ならない。孔子が読んでいた『易経』も、普通一般の「縄」で綴じたものに過ぎない。

ところで、孔子は冊書となっていた『易経』をどういう風にして読んでいたのだろうか。恐らくは巻物の形をしていたであろう竹簡のそれぞれを韋編はどのように綴じられ、収巻されていたのだろうか。

ここに、それを語る格好の出土簡牘が存在する。

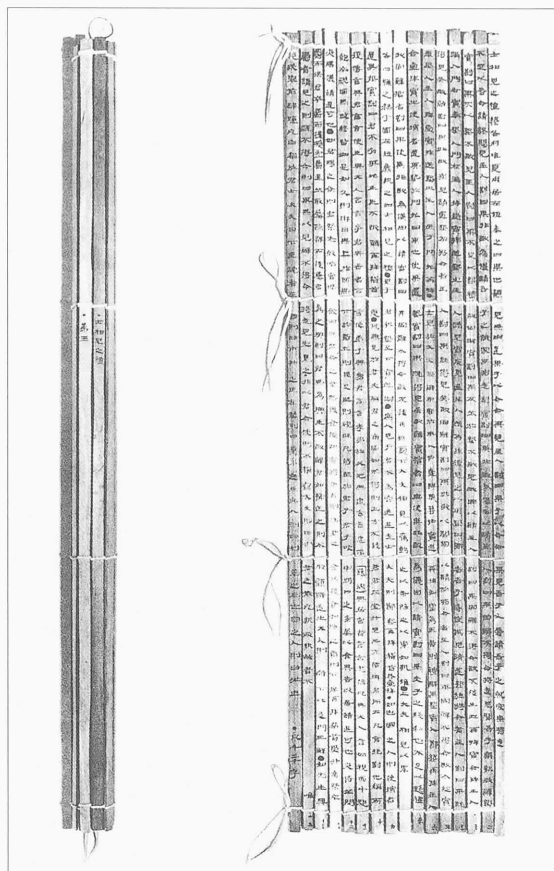


図1

図1は、武威県の漢代墓の中から発見された『儀禮』という『易経』とおなじ経書である。長さは約55センチ、当時、経書は2尺4寸(55.92センチ)の札に書くきまりであったので、出土の簡は規格に合ったものといってよい。武威出土の『儀禮』簡は総数500枚ほどであり、ここにあげたのは「士相見之禮」と呼ばれる編であり、合計16枚の簡、1020字が書かれており、それで一卷全部である。

現行本の『儀禮』との対比など興味あるこれは出土文字資料だが、いま注目したいのは、「士相見之禮」なる編名が書かれている簡とその位置である。すなわち、先頭の第一簡と第二簡の背面にそれは記入されており、このことは最後の簡から文字の記入した面を内側にして先頭の簡に向かって巻きこんでいくことを意味している。巻き終わった段階では、編名と編次が表側に位置し、広げて読むにあたり、順次先頭の簡から開いていけばよく、書物の形式、収巻の方法として理にかなっているといえよう。

最後の簡から巻きこんでいくのであれば、綴

じ縄も最後の簡からかけていくはずで、綴じ紐の余りは、先頭の簡にきて、収巻した場合の余り紐が処理しやすい。すなわち、図1の復元の仕方は、紐のかけ方において、誤っているといわねばならない。

書物簡は以上のような体裁をもっていた。しかしながら、すべての冊書がかかる収巻の方法をとっていたのかといえば、そうではない。

図2は、敦煌近辺の懸泉置遺址で出土した冊書である。前漢陽朔二年(23BC)の紀年をもち、綴じ糸がそのまま残っていた編綴木簡であるが、その綴じかたは先に述べた方法とは異なり、紐の余りが最後の簡にきており、先頭簡から紐がかけられてきたことを示している。

この冊書は、車輪の破損状況を記したリスト(帳簿)と、それを上級官庁に送る送り状がついた簡牘であるが、こういった帳簿の類は、おそらくは先頭簡から巻きこんでいったに違いない。帳簿は、順次追加されていくもの、いわばカードの集積でもある。今日我々の状況もそうであるが、追加もしくは入れ替えという点では、最初か

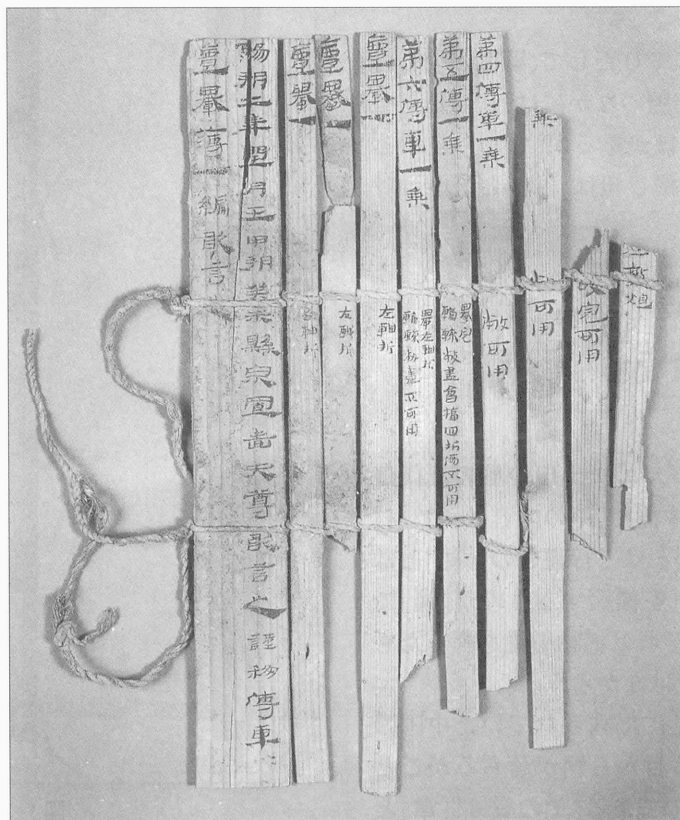


図2

ら巻きこんでいき、また先頭簡から紐をかけていくほうが機能的だといえよう。事実、ここにあげた例だけでなく、いくつかの帳簿簡は最終簡の背面に署名、点検の注記をもつものもあり、収巻は第一番目の簡から、巻き込んでいったことをはっきりと物語っている。

読むための書物簡と、整理のためのファイル簡とでは、同じ冊書の形態をとってはいるが、編綴、収巻に違いがあったのである。

このことを踏まえて、私はさらに次のような仮説が導き出せるのではないかと考えている。

書物には、完成品となる前段階、言い換えれば編纂の過程があった。それは追加・挿入・組替えの作業に他ならないが、簡牘といった書写材料

は、それが一種のカードともいえる特徴を有していたがため、編纂は容易であった。とともに、追加・挿入を前提としたファイル簡の期間を経た後に書物簡として完成を見た。

中国戦国時代、紙が未だ発見されてはいない諸子百家の書物には、同じ内容をもった編が存在し、また明らかに他の思想家の書、その一部が混入した形跡が認められる。そういった現象は、当時の簡牘といった書写材料、その編綴の有り様が与って力あり、また書物はかかる編纂の過程を経てきたことを如実に物語っていると思われるのである。

(とみや いたる)

新 入 生

オリエンテーションのご案内

新年度のスタートをきる4月、キャンパスに咲く桜と新入生の姿が本格的な春の到来を感じさせてくれます。新入生の皆さんに図書館の利用方法をお知らせして、大いに利用していただこうと、右記の日程でオリエンテーションを開催いたします。図書館の建物内の設備やいろいろなサービスを知っていただき、キャンパス・ライフに役立てていただきたいと思います。同じ内容で、5回開催しますので、都合のよい日にご参加ください。

日 時：4月19日（月）～23日（金）

時 間：12：10～12：45

場 所：附属図書館3階AVホール

内 容：1. 附属図書館の設備の案内
2. 各種サービスの内容説明
3. カード目録とOPAC*について

オプション

希望される方に、終了後約15分ほど1階OPAC端末で実習を行います。

*OPAC：学内所蔵の図書や雑誌を検索するシステム